
Perseids

深月姫季

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P e r s e i d s

【Nコード】

N 4 8 7 0 C

【作者名】

深月姫季

【あらすじ】

夏の夜、屋上に来た少年探偵団＋蘭。目的は…

「うわぁ…星がいっぱい見えるよ」

歩美がはしゃぎ声を上げると、光彦も屋上の手摺りに駆け寄り、静かな闇に爛々と輝く結晶を眺めた。

「本当ですね…今日は新月ですから、余分な光が無くて星達ばかり見えますよ」

元太はコンクリートに寝転び、指を差しながら星を数え始めた。

「いち、にい、さん…多すぎて数え切れねーぞ」

「蘭ねえちゃん、ごめんね。博士が急に腰を痛めちゃって…」

哀とコナン、そして蘭は、屋上に設置されたベンチに腰をかけた。蘭は濃紺に紅色の模様のついた浴衣姿で、優しく笑い、空を見上げた。

「いいのよ、予定も無かったんだし。園子はグアムに旅行中だから。それに、こんなにたくさん星を見たのなんて、久しぶりだね！」

六人は、帝丹小学校の屋上に来ていた。普段は危険な為に公開はされないが、ある事情により、特別に開放されたのである。とはいっても、屋上に人は疎らだ。きっと、蒸すような湿気の中で蚊との格闘をする事に嫌気が差し、自宅から眺めているのだらう。

コナンは水色の浴衣を身に纏った哀に目を遣った。哀は目を細め、北東の方角を見たまま動かない。

「哀ちゃん、本当に見えるのかなあ、流れ星」

動かない星の観察に飽きたのか、

歩美が哀の隣に腰掛け、帯に差していた団扇で煽ぎ始めた。

「ええ、方角は北東。それに、今日がピークだと新聞に載っていたし、円谷くんが言ったように新月だから最高の環境よ。ほら、向こうが北東」

何時の間にか集まっていた元太、光彦も敬服したように二度頷く。

元太が方角を知らないのを見越し、きちんと指で指し示したことに気付き、コナンは微笑んだ。

「そうだな、今日なら多分、最低でも二分に一回は見えるはずだ。

それに、ペルセウス座流星群の流星は流れる速度が速いが、途中で急に光を増すこともある。あと明るい物が多いから、判別しやすいと思うぜ」

いつもながら知識に富んだ二人を、少年探偵団は尊敬の眼差しで見える。蘭は少し遠くから、何時もながらに博識なこの少年を疑わしげに見遣った。

コナンは少し自慢げに話を続けていたが、哀に肘で突かれたことで自分の現在の立場を思い出し、反射的に口を噤んだ。

「……って、朝天気予報のお姉さんが言ってたよ！」

思いつきり作った子供の声で言うと、蘭は思い直したように立ち上がった。

「さあ、北東の方で早速流星を見ようよ、三回願い事を掛ければ叶う、って言い伝えもあることだし…素敵よね」

蘭の言葉に、歩美たちも立ち上がり、北東の方に目を凝らした。やがて流星に集中し始め、皆が無口になった時、蘭が小さく声を漏らした。

「ほら！」

蘭の指差す方向を見る必要は無かった。数秒の間を置きながら、至る所で星が降り始めたのだ。

「歩美、びっくりしてて願い事出来なかった」

落胆した表情で一瞬歩美がコナンの方を見た事に哀は気付き、そつと歩美の耳元に口を寄せた。

「大丈夫よ、まだまだ見られるから。下を向いているのがもつたないわ。ほら、お願い事するんでしょ」

「うん、哀ちゃんありがとう！…歩美、頑張る」

そんなやり取りの間に挟まっている元太は、一生懸命「うな重…100回」などと唸っている。蘭はそんな子供たちを微笑ましく眺め、自分も願い事に専念する事にした。

幾千もの星の輝きの間をすり抜け、流れていくペルセウス。

蘭が心の中で願いを唱えていると、コナンが蘭の横に来て、そんな蘭を横目でチラリと見た。

「蘭ねえちゃんは、どんなお願いをしたの？」

「私はね、新一の事」

蘭は、小さく見える街並みの中、米花町二丁目の洋館を指差した。

「早く帰ってくるように、って事？」

「ううん、怪我とかしませんように、って。ほら、あいつ好奇心旺盛で危ない事に直ぐ首突っ込みたがるんだから。そのくせ自分の事には無頓着で、自分を守るなんてこと考えないんだから」

蘭の的確な指摘に、コナンは一瞬たじろいだ。

当たってるよ、その好奇心のおかげで今小学生になっちまってるんだ、と口の中で呟く。

「コナンくん、何か言った？」

吹き付ける夏風になびく髪にを耳に掛けながら、蘭はよく聞こえなかった、と言うようにコナンに顔を近づけた。コナンは浴衣のせい、か、蘭が知らない女性に見え、ドギマギしながら視線を外す。

「う、ううん。」

「なんでもないよ」

蘭は視線を空に戻した。

「コナンくんは、何をお願いしたの？」

「うーん…ボクは秘密」

自分の前で手を振ったコナンに、蘭は悪戯っぽく微笑んだ。

「哀ちゃんや歩美ちゃんを泣かせちゃダメよ」

歩美はともかく、何故灰原？と首を傾げる。

「コナンくんも鈍いのね。まるで新一みたい」

悪戯っぽい微笑みと共に蘭がコナンの頭に手をやり、コナンは苦笑する。

もつとも、自分が願ったのは、もつと、ずっと、先のこと。保証のない未来に、唯一、叶って欲しい事。

コナンは心の中で蘭と新一の姿を思い浮かべながら、幸せそうに微笑んだ。

流星はまた一つ流れ、
流星痕を残し、消えていく。

来年の夏、自分は一体どうなっているのだろうか。
そんな事を考えながら、
熱い夏が、また一つ終わりに近付いていた。

— 完 —

（後書き）

駄文ながら読んでいただき、
有難うございました。

自分自身、流星を見るのが好きで、
昨日見ていた時に書こう、と決意した作品です。
皆さんもお暇なら流星を見てください^^
嬉しくって、

願い事を想うのを忘れてしまいました。A

では、また何れ何処かで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4870c/>

Perseids

2010年11月21日14時30分発行